

巻頭言

2008. 8月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

鈴の鳴る道

茗溪塾塾長 宇野雅春

夏期講習もちょっとヤマ場を過ぎました。次のヤマ場である合宿を控えて、多少勉強疲れの出ている生徒もいると思います。あと少しです。実力をあげる大切な夏です。受験生は、とにかく悔いを残さぬよう頑張っしてほしいと思います。

7月の中旬、友人が、入院したというので、大学の付属病院にお見舞いに行きました。

今時の病院の設備の立派さにもビックリしましたが、友人も思いの外元気そうで、ほっとしました。お見舞いの途中で、家族の方が見えられたので、ほんの20分くらい、同じフロアの休憩室で時間つぶしをしました。ふらりと見舞って、すぐ帰る予定でいたので、手ぶらで何もなく、休憩室のマッサージ機を試したりしていたのですが、ふと目についたテーブルの上にあった3冊の絵本らしき物をめくって見ました。美しい花の絵が詩とともに並んでいました。星野富弘という人の絵と詩をまとめたものです。後でこの人はものすごく有名な人と知るところなのですが、読み進む内に言葉に言い尽くせないような感動を覚えました。入院も初めてという友人の心境を思っていたせいかもしれません。

最初に心に響いたのは次のような詩です。

「今日も1つ 悲しいことがあった 今日もまた1つ うれしいことがあった

笑ったり ないたり 望んだり あきらめたり にくんだり 愛したり...

そして これらの1つ1つを 柔らかく包んでくれた 数え切れないほど沢山の

平凡なことがあった」

読み進んでいくうちに、描かれている絵が、手で描いた物ではないことを知りました。口に筆をくわえて描いた物です。

星野富弘氏は中学校の体育教師だった時に、クラブ活動の指導中、頸椎を損傷し手足の自由を失いました。筆を口に咥えて絵を描くのは、一日2時間が精一杯といいます。いろんな人に助けられながら絵を描き、詩を書き続けています。「鈴の鳴る道」はその中のエッセイのような小文です。

星野氏はある時、車いすに鈴をつけます。その鈴は道のでこぼこで、とても良い音を出すので、そのことが楽しみになっていきます。そしてあることに気が付きます。

「人は皆この鈴のようなものを心の中に授かっているのではないだろうか その鈴は 整えられた平らな道を歩いていたのでは鳴ることがなく 人生のでこぼこ道にさしかかった時揺れて鳴る鈴である 美しく鳴らしつづける人もいるだろうし 閉ざした心の奥に押さえ込んでしまっている人もいるだろう 私の心の中にも小さな鈴があると思う その鈴が澄んだ音色で歌い きらきらと輝くような毎日が送れたらと思う 私の行く先にある道のでこぼこをなるべく迂回せずに進もうと思う」

30年ほど前に書かれた文章です。似たような年代なのに、気が付かないまま年月を重ね、思いもかけず出会ったという気がしました。そういうこととは全く違うことなのですがこのとき思い浮かんだのは、秋葉原の無差別殺傷事件や14歳の少年のバスジャック、15歳の少女が父親を殺害するという若い人を巡る事件です。

生徒の年代の時、実は誰もが多かれ少なかれ「困難」を持っています。それが実は美しい「鈴の音」につながるものだということを、この本は教えてくれているように思えたのです。死の淵から回帰し、治る当てのない病いの中で、世話になっている人達に「ありがとう」を言いたい一心から、口で絵を描くまでの数々の努力を積み重ねた星野氏の絵は、人間というものの限りない可能性を示してくれている気がしたのです。

病院の片隅に、誰が置いてくれたのか...多分沢山の人が勇気づけられたと思います。